

本願寺「自死問題実態調査」の分析結果（1）

教学伝道研究センター
現代宗教課題研究部会

■はじめに

教学伝道研究センターでは二〇〇八年（平成二〇）年五月に本願寺派の全寺院を対象とした自死問題に関するアンケート調査「自死問題実態調査」（以下「本調査」と表記）を実施いたしました。その結果、二六九四通の回答がありました。ご多用な中、ご協力いただいた方々には、この場を借りて謝意を表したいと思います。宗門や教学伝道研究センターに対し、多くの貴重なご意見をいただきましたこと、まことにありがとうございます。

本調査について、いろいろな角度から分析を試みましたがところ、さまざまな課題が浮き彫りとなつてきています。そこで今号から数回にわたり、その分析結果を報告させていただきます。この報告をおして、あらためて考えてみる機会としていただければ幸甚に存じます。

なお、本調査の主な目的は、(1)僧侶の自死に対する意識調査、(2)活動事例の収集、(3)全寺院の僧侶に対する意識啓発であります。

また、調査の内容を大まかにいえば、①自死に関する意識調査、②自殺防止活動団体・自死遺族支援団体の認知度、③自死者葬儀の対応（配慮していること、苦慮すること）、④自殺対策活動の事例収集、⑤宗門の活動についての提案・期待・要望の五点です。このうち、今回は①のデータ結果から見えてきたことについて報告いたします。自由記述欄に書かれていたさまざまのご意見については次回以降に報告いたします。

■意識調査の概要

本調査について、いろいろな角度から分析を試みましたがところ、さまざまな課題が浮き彫りとなつてきています。そこで今号から数回にわたり、その分析結果を報告させていただきます。この報告をおして、あらためて考えてみる機会としていただければ幸甚に存じます。

なお、本調査の主な目的は、(1)僧侶の自死に対する意識調査、(2)活動事例の収集、(3)全寺院の僧侶に対する意識啓発であります。

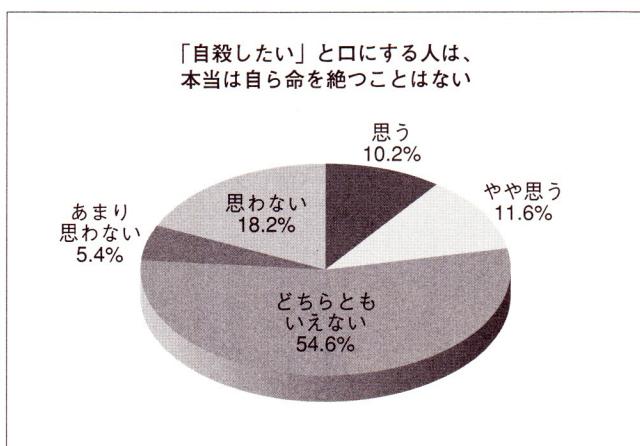
また、調査の内容を大まかにいえば、①自死に関する意識調査、②自殺防止活動団体・自死遺族支援団体の認知度、③自死者葬儀の対応（配慮していること、苦慮すること）、④自殺対策活動の事例収集、⑤宗門の活動についての提案・期待・要望の五点です。このうち、今回は①のデータ結果から見えてきたことについて報告いたします。自由記述欄に書かれていたさまざまのご意見については次回以降に報告いたします。

意識調査は、自死に関するある意見について、「思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の五つの選択肢の中から、自分の考えにもっとも近いものを選んでいただく設問です。設問内容は、「『自殺したい』と口にする人は、本当は自ら命を絶つこ

とはないと思う」「自死は何の前触れもなく突然起くると思う」「自死は個人の自由意思にもとづく選択として認められると思う」「自死は社会的な要因が強くはたらいていると思う」「自死は命を粗末にしていると思う」「自死は弱い人がすると思う」「自死は仏教の教えに反していると思う」「自死は場合によっては仕方がないと思う」というものです。これららの調査結果 자체は、文末のグラフを見れば一目瞭然でしようから、ここでは興味深い結果が得られた項目のみについて報告いたします。

■「自殺したい」と口にする人は、命を絶つことはないのか？

まず一つ目は、「自殺を口にする人は、本当は自ら命を絶つことはないと思う」という設問についての報告です。この設問では、「どちらともいえない」と回答した人が最も多く、五四・六%となっています（図1）。おそらく「どちらと



〈図1〉

「もいえない」を選択した方は、その言葉を発した人の意識には、いわばレベルの差があつて、冗談で口にする人もいれば、真剣に強くそう思っている人もいるのだろうという考え方から、それを選んだのだと思われます。しかし、「自殺したい」とさまざまな状況を想定しながら誠実に考へて、最終的にそれを選択されたのだと思われます。しかし、「自殺したい」ということが挙げられています。

また、自殺対策支援センター・ライフリンクによる自死遺族への調査によると、故人が自殺のサインを出していたと思う人は四六・二%にのぼっていますが、その方々の中で、その当時にサインに気付いた人は二〇・六%という調査結果が出ています。ⁱⁱⁱ⁾ここでいうサインとは言葉だけにはかぎらないと思われますが、言葉に発するということは大きなサインであるともいえます。

言葉によるサインには、「もうどうでもいい」「もうやつていけない」などさまざまにあるのでしようが、「死にたい」「自殺したい」などのストレートな表現は大きなサインである可能性が高いので、受け流したり、話題を変えようとせずに、本気で受け止める必要があるよう

に思います。それが他人からみると、たとえ冗談で言っているようにみえる場合でも、本人の意識は決してそうではないこともあるのではないでしようか。ふだん明るくふるまつているようにみえる人でも、少なくとも「死にたい」という言葉を発すると、ことの裏には大きな苦悩があるに違いありません。ですから、そこに目を向けて、その思いを傾聴していくことが求められているといえるでしょう。

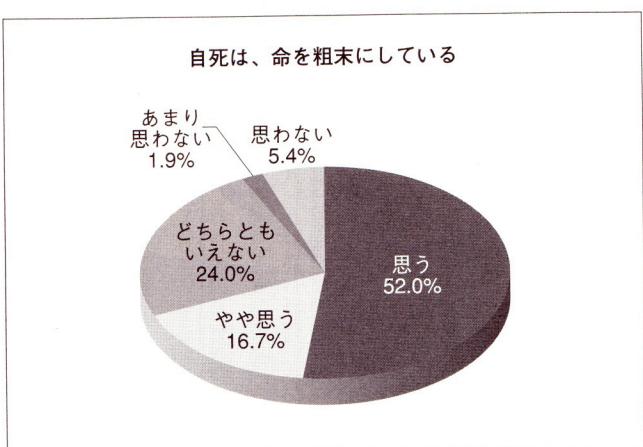
■自死は命を粗末にしているのか？

一つ目は「自死は命を粗末にしていると思う」という設問です。これは一般に「自死は命を粗末にしている」という風潮が強いようなので、僧侶がどのように考へているかを調査するために設けました。これについては「思う」「やや思う」を足すと六八・七%となります（図2）。

この設問の結果からは多くの僧侶が「自死は命を粗末にしている」と考へている

ということが見えてきます。
ここで、この「自死は命を粗末にしている」という問いをみなさんにも考へていただきたいと思うのです。もちろん命はかけがえのないものであり、尊いものです。しかし、そもそも「命を粗末にする」とはどういうことなのでしょうか。

次は「自死は弱い人がするものである」という設問です。この設問も一



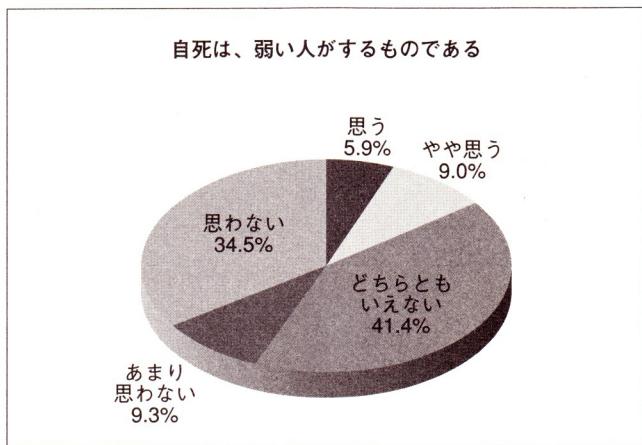
〈図2〉

いう思いをもつっていたのだといわれています。人は本来「生きる」という本能があるように思います。「亡くなつた方々は、一所懸命に「生きる」という道を模索しながらも、さまざまな要因によって寄る辺がなくなつてしまい、生きていくことができなくなつたという状況にあつたのだと現場で活動されている方の指摘もあります。その「死にたい」というほどの苦悩に思いを馳せてみた時に、はたして「粗末にしている」といえるのでしょうか。また、身近な人を自死で亡くされた方が、「命を粗末にしたのだ」という言葉を耳にしたら、どのように感じるでしょうか。「自死は命を粗末にしている」という考えは、ひとつの中見として成り立つかもしれません、第三者的な意見になつてはいなでしようか。

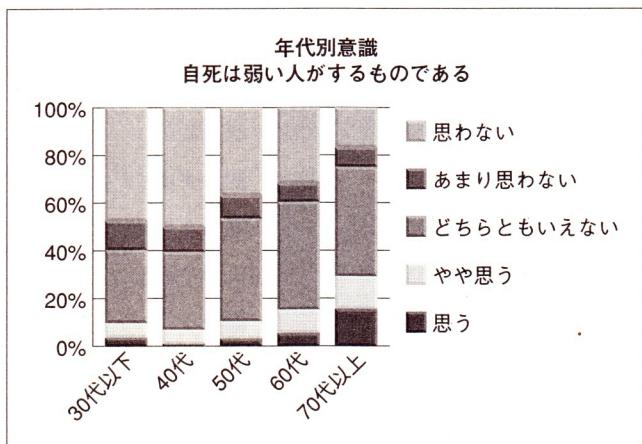
■自死は弱い人がするのか？

次は「自死は弱い人がするものである」という設問です。この設問も一

般に「自死は弱い人がするものだ」という風潮があるように考えられるというこ^トから設定いたしました。ただし、この設問に関しては「弱い」という言葉の定義が人によつてさまざまにあるでしょ^うから、回答者が具体的にどのように考^えているかまでは判断ができません。それ^{を踏まえたうえで考}えなければならぬ面もありますが、「どちらともいえない」



〈図3〉



〈図4〉

が一番多くなつたことの原因は、そ^{うし}た意識を背景としているのかもしません(図3)。そして、自由記述欄に「人はみな弱いもので、どんな人であつても自死を選択する可能性はある」という意見も目立ちました。そういう方が「思う」を選択したのかもしれません。こうして考^えると、「自死する人が弱い」というわけではない」と考^えている回答者も少な

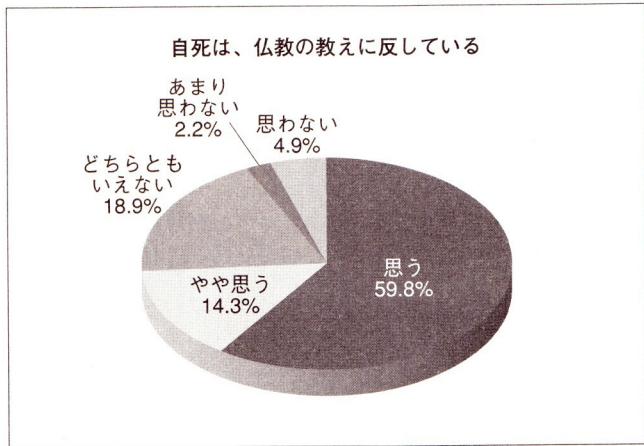
くないと推察されます。ひとところ「プラス思考」「ポジティブ・シンキング」といった考え方があつたからかもしれません。現在の日本社会のなかに「人は強くなければならぬ」という風潮があるとするならば、ここに悩みを抱えている人を追い込んでしまうという現実があることは憂慮すべきことだと思います。

なお、この設問に関しては年代によつて考^え方が異なるといふ傾向も出でています(図4)。このグラフを見ますと、年^代が上がるほどに「自死は弱い人がするもの」と考^えている割合が高くなるといふことがわかります。逆に若い世代の人は、そうは思つていないと^う結果が出でています。

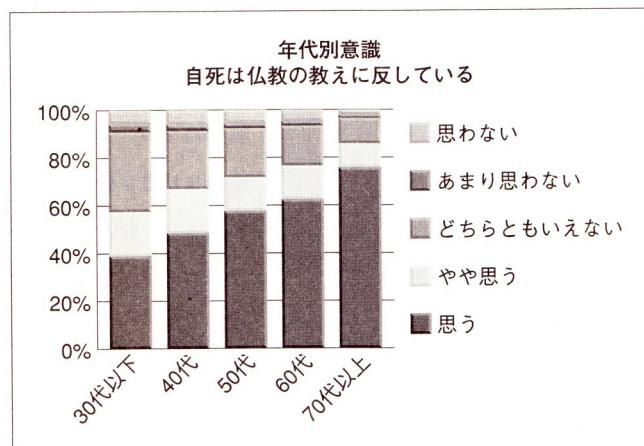
■自死は仏教に反するのか?

次は「自死は仏教の教えに反していると思うか」ということを問うものです。これも回答に窮する質問だったかもしれません。ただ、おおよそどのような意識

をもつてているのかを調査するために、あ
るいは一考していただくために、このこ
とを問い合わせました。数字の上からは
「思う」が圧倒的に多く、「やや思う」と
合わせますと七四・一%となります（図
5）。多くの僧侶は仏教の教えに反して
いると考えていることがわかります。た
だし、このことに関しても年代別による
傾向がみられます。それをあらわすグラ



〈図5〉



〈図6〉

死（自殺）をどう位置づけるかについて
逡巡しているといえるのかもしませ
ん。仏教から「自死」をどう見るかとい
うことは非常に大きな課題であって、そ
れを論述していくには相当な道のりを要
します。

仏教説話のなかには、仏弟子などの自
死（自殺）を厭尊が認める話も出てきま
すが、それらの個別の事例から一般化さ
れた理論を導き出すことはできません。
こうした教義と現代の自死（自殺）との
関連をきちんと議論することが、これま
で不充分だったという現状は否めませ
ん。ですから、今後も議論を重ねていか
なければなりません。ただ、それぞれの
ケースにおいて状況が違うでしょうか
ら、一括りにしてしまうことは危険です。
まず、このことを考える必要があるよう
に思います。教学伝道研究センターにお
いても、今後、皆様と共に議論を進めて
いきたいと考えていますが、身近にいる
一人ひとりの方の苦悩にどう寄り添つて
いくかが、早急な課題であるといえます。

先の設問と合わせて考えてみると、自
死（自殺）に対して、世代間による考
え方の違いが生じてきているのかもしれま
せん。あるいは、この設問に限つていう
と、若い世代は「どちらともいえない」
の回答が多く、仏教の教えからみて、自

■相談経験の有無による

意識の違いについて

さて本調査では、自死（自殺）に関する相談経験の有無を問う設問もありました。

その結果は、「死にたい」という相談を受けたことがある人（以下、希死相談経験者）は全体の一五・〇%、遺族から相談を受けたことがある人（以下、遺族相談経験者）は二九・〇%でした。

これをうけて、自死（自殺）に関して

相談をされた経験のある人との比較下、「ない人」を「経験なし」と表記）とのあいだに、意識の違いがあるのではないかという仮説のもとに、先に報告した

意識調査について、相談経験のある方と経験のない方との比較をしてみました。結論を先にいうとそれほど大きな差違はみられなかつたので、若干の差違があるデータのみ、数字で提示しておきます。

まず「自殺を口にする人は自ら命を絶つことはない」の設問ですが、これに対

して「思わない」と回答した方の割合だけ報告します。希死相談経験者は「思わない」と回答した人が二五・四%、遺族相談経験者は「思わない」が一四・九%となっています。

同様に「自死は命を粗末にしている」の設問については、希死相談経験者は、「思う」と回答した人が四六・〇%（「経験なし」は五一・六%）、「思わない」と回答した人が六・九%（「経験なし」五・二%）となり、ほんのわずかではあります

が、相談経験者は経験のない人と比較すると、「命を粗末にしてはいない」と考える割合が高いことがうかがえます。

次に「自死は弱い人がすると思う」の

設問に対しても、遺族相談経験者は、「思う」が五・〇%（「経験なし」は六・〇%）、「やや思う」が七・一%（「経験なし」は九・二%）であり、「思わない」が四一・二%、希死相談者は四〇・三%（「経験なし」は三一・六%）と若干の差違が出ています。相談経験のある人は、

わずかではありますが、「弱い人がするとは思わない」の方に軸が動いていることがわかります。

また、「仏教の教えに反している」の設問については、希死相談者は、「思う」が五〇・四%、「経験なし」は六一・九%）で、「思わない」が六・七%、遺族相談者は七・〇%（「経験なし」は三・九%）というわずかな違いが出ています。

これも相談経験のある人は、「仏教に反しているとは思わない」の方に軸が動いていることは思わない

察されます。この相談経験の有無と現場

での対応の相関については、今後、葬儀の場面での対応についての調査項目でどのような違いがみられるのかを確認していきたいと考えています。

■ 今回のまとめ

意識調査における自由記述欄には、その他さまざまな意見が寄せられました。たしかに、自死については、さまざまな考え方や立場があると思われますが、自由記述欄でこのような記述もあります。「自死についてあらためて考え直すことができた」という声です。一口に自死といっても、それぞれの人にその人が生きた歴史、ないしは物語があるのであって、そこに一定の評価はできないはずです。いかなる評価であれ、客観的な立場から「自死とはこういうものだ」と決めつけてしまうことが、その生涯を懸命に生きた人を亡くしてしまったご遺族の方のこころを苦しめている現実があるの

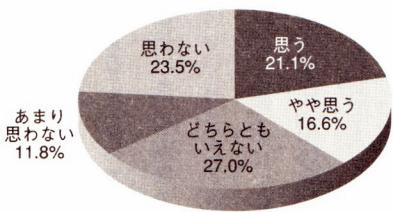
かもしれません。

なお、意識調査の自由記述欄には数多くのご意見をいただいていますので、その分析報告、および他の調査項目については、次号以降にて報告していく予定です。

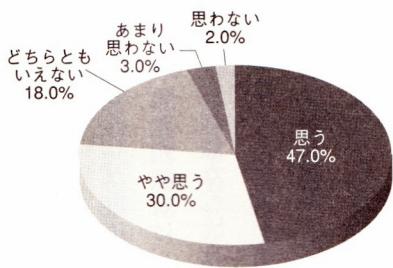
(研究員・武田慶之)

i その他の意識調査の結果

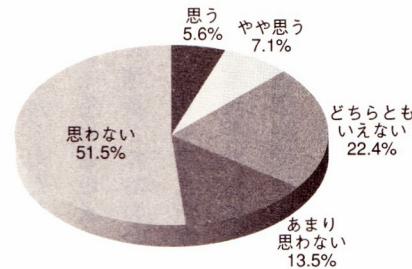
自死は、何の前触れもなく突然起こる



社会的要因が強くはたらいている

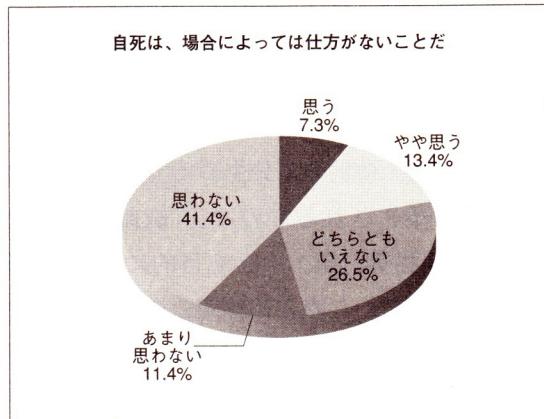


自死は、個人の自由意志にもとづく選択として認められる



ii 高橋祥友『自殺予防』(岩波新書、二〇〇六)、七三頁。そこには以下のようになります。

これまで挙げてきたような項目（引用者註：喪失体験、病気、精神疾患、飲酒量の増加など）を数多く満たす人が「自殺」をほのめかしたり、実際にはつきりと口にした場合は、自殺の危険が非常に高くなっている。「死ぬ、死ぬ」と言う人は本当は死なないと広く信じられているが、これは大きな誤解である。自殺者の大多数は、最期の行動を起こす前に自殺の意図を誰かに打ち明けている。これを的確にとらえられるかどうかが自殺予防の重要な一步



になるのだ。
iii 自殺実態解析プロジェクトチーム編集『自殺実態白書』2008【第二版】、四六五頁。